

# 博物館展示法の一考案

— ジオラマ展示を題材として —

A Consideration of the Display Methods in Museums

— Dioramas —

金 山 喜 昭<sup>\*</sup>  
Yoshiaki KANAYAMA

## 1. はじめに

ジオラマ展示とはいったいなにか。市民にこの問いをなげかけても、その解答はほとんど返って来ないだろう。

それは、図1のごとく平面半円形のプランで、しかも一方に見学用の開口部をもつボックス内部を利用した展示装置を指す。そこに、例えば、動植物の生態展示を目的にするならば、自然環境を表現した絵画を背景に描き、また動物剥製や樹木・草本などの実物や模型を前面に用意する。その結果、見学者は資料同士の有機的関係を一瞥で理解できる。しかも、臨場感をかもしだすといった展示効果まで働く仕組みになっている(写真1)。その対象は、なにも動植物生態展示のみならず、歴史や産業および理工展示などに至るまで応用範囲が広い。

今日でこそ、博物館にジオラマ展示を採用する例は多数にのぼっているが、戦前までの我国では、その存在は皆無に等しかった。だが、欧米の博物館を見聞した知識人の胸中には、ぜひとも我国にジオラマ展示を導入・普及すべく根強い願望が息づいていた。考古学者の浜田青陵もその一人であった。その著書『考古学入門』<sup>(1)</sup>を少しばかり紐とくならば、

博物学方面の博物館もまた立派なのが各地に設けてありますが、ことにワシントン、シカゴ、ニューヨークなどにあるものはよく完備しております。動物の標本は皆、パノラマ風景の中に、それをあしらって、自然の景色の中にそれぞれ動物が棲んでいる所を見せることに努めてをりますから、見物人は大人

でも子供でも興味をもってそれぞれ動物の生活状態を知ることが出来るのです。かような博物館はアメリカの各州に1つや2つは必ず設けられてあるのは実に羨ましいと思ひます。せめて日本にこんなのが1つでも設けられたらと思はずにはゐられません。

我国の博物館が抱く将来に期待と不安をつのらせた浜田の偽らざる心情であろう。そして浜田の心意気に呼応するかのごとく、戦後、我国の博物館はめざましいきおいで建設がおすすめられ、その総数はいまや3000館を凌駕するとまでいわれている。殊に、近年の博物館は組織体制の整いもみせ、最新の展示技術を駆使した展示学の発達もあいまって、市民と博物館の連携もより緊密化しつつあり、むしろ博物館は従来の市民に「みせるための博物館」から、市民が「参加するための博物館」へと質的転換を遂げつつある。

ジオラマ展示の本格的な導入・普及も、当然こうした波に乗じたわけである。そして、ジオラマ展示に対する議論的的は、主に製作技術面に精力が費されてきたおかげで、我国のジオラマ展示技術は世界的にも特筆されるべきものとなりつつある。しかし、他方では、ジオラマ展示を展示学ひいては博物館学総体上から検討を加えることが等閑りにされてきた。そこで本稿は、こうした観点からジオラマ展示を題材にしなが、その歴史的変遷や特徴、あるいは問題点などについて若干の考察を試みるものである。

\* かなやま よしあき  
国学院大学博物館学研究室

原稿受理：1982年8月9日  
連絡先(勤務先)  
〒150 東京都渋谷区東4-10-28  
(電話)03-409-0111(内線331)

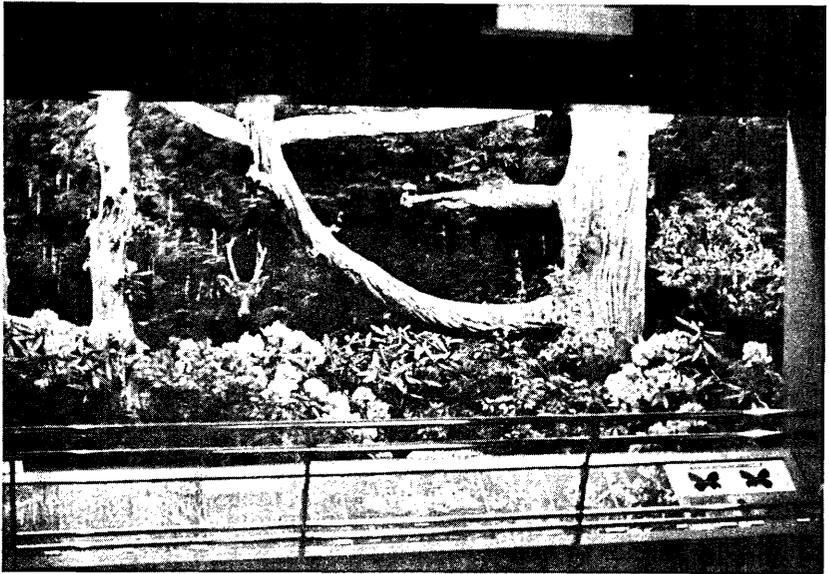


写真1 ジオラマ  
展示の全景  
(鹿児島県立博物館)

## 2. ジオラマ展示のおこり

### (a) 西欧の場合

ジオラマ展示は、一般にジオラマと通称されている。本稿で扱うジオラマ展示という語も実はジオラマと同義であるが、用語の規定概念を明確しておく上で、ジオラマ展示を通称ジオラマと区別しておきたい。本来、ジオラマ(Diorama)なる語は、ギリシア語の「透し」(dia)と「見る」(herao)から成る。この透し見るとい

語(Diorama)は、1923年、パリにて写真技術の先駆者として名高いフランス人タゲール(L. J. M. Daguerre)とボートン(C. M. Bouton)の二人が発明した透明の布地に描いた新種類の油絵に使用したことが発端であった。<sup>(2)</sup>それがいつのまにか油絵ばかりではなく、それを納めた小型ケースまで意味するようになり、さらには今日通称するジオラマという展示形態に至るまで、意味が変化してきたわけである。この点について、棚橋は次のごとき疑問をはさんでいる。

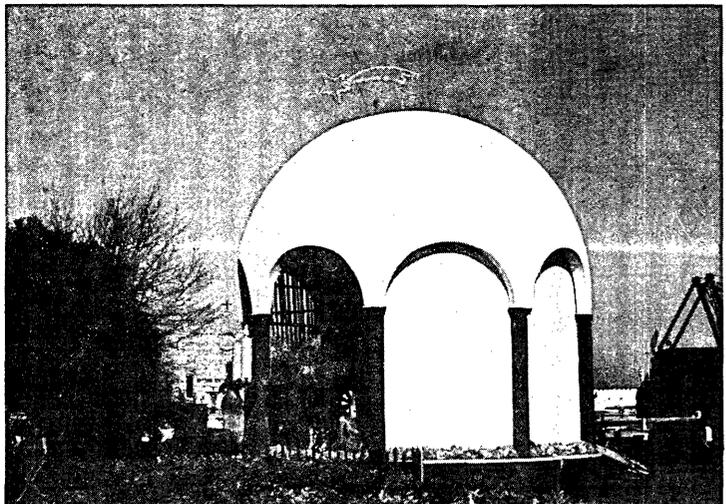


写真2 市民生活に生きる  
ジオラマ展示施設  
(ギリシア・ロードス島にて)



写真3. ジオラマ展示施設  
内の「キリスト降誕」  
風景  
(ギリシア・ロードス島にて)

タゲール、ポートンのこの透明画の一連から成るジオラマは、今日の主として曲った背景画と立体的前景とを、人為で透視的に融合させて出来ているところの小型グループとは、根本的に異ったものである。従ってこのグループにジオラマなる語を使用することは全く正しくないのである。しかしながらこれまでの住きがかり上、これが慣行を強いられるのはやむを得ないのである。(点線部分は筆者による)

棚橋の発言はジオラマの概念規定に根本的な疑問を投げかけながらも、同時にその問題解決を中座してしまっている。この問題点の解決策の一環として、本稿では従来のジオラマをジオラマ展示に改言することを、まずここでおこわりしておきたい。

ところで、背景画と模型を併用しながら、場所や人物、事件ならびに自然の表現に現実と異った一種の錯覚をおこさせたり資料同士の有機的関係を示すという今日のジオラマ展示の規定にしたがうならば、その発祥はタゲールらの発明よりもさらに以前の中世の頃まで遡ることができる。ヨーロッパ各地の教会では、クリスマスになると「キリスト降誕」をジオラマ風に仕上げて、市民に披露するしきたりがあった。<sup>(3)</sup> 現在でもその風習の残存している地域があり、筆者はギリシア、ロードス島にて偶然それを目にする機会を得た(写真2, 3)。それは、ドーム形の天井をもった円形建物の開口部を市民はとり囲むようにして、ある者は見やり、またある者はそれを背景に記念写真を撮ったりして結構築きそうな光景であった。建物のなかを眺きこむと、そこにはキリスト誕生と

それにまつわる登場人物の模型を中心に草木や岩石などの自然物模型が組み合わさり、背景に描かれた壁画はみごとな立体観、臨場感を引き立たせていた。

19世紀にはいと、西欧は市民革命の影響をうけて市民層の自由主義的発想がみられ、それ以前までの所謂王宮博物館はなりを潜め、市民の、市民による、市民のための新たな博物館が要望される時代となった。<sup>(4)</sup> 学術の進歩も手伝い、博物館教育の議論も本格的な時期をむかえるにいたってターゲルら以来のジオラマが自然科学系博物館を舞台に発展・踏襲化された。

1815年、イギリスのバロック博物館(Bullock's Museum)では、動物の生態を表現すべく新式の展示法を考案、実施した。これは、キリン、ライオン、犀などの動物群が実際に彼らの棲息する草原や森林を徘徊する生態を復原したものであった。そのために、動物達の剥製や自然物模型を巧妙に配置し、遠近法で描いた景観図を背景にしつらえた、今日いうジオラマ展示の原型のごときものであった。しかし、いつの世にも進歩派がいれば保守派がいて、相対立するものである。殊に、イギリスのごとき伝統を強靱に主張するお国柄の博物館では、伝統的な単品陳列法を温存したがる保守派体制が主流を占めていたため、こうした展示が本格的採用をうけるまでには、いまだ歳月の猶予が心要であった。

そして、1880年、イギリスのサウスケンシントンの大英博物館分館(現在Natural History Museum)は、バロック博物館の生態展示を引き継ぎ、ここに初めて本格的なジオラマ展示による動物の生態復原が導入・

普及する運びとなったのである。館内の英国鳥類展示室には、各種の鳥類の親鳥、雛、卵などの実物や剥製を、棲息地の環境が描かれたケースに納め、原地の植物や土石なども配置して、その生態が一目で理解できる仕組みになっていた。これは、市民や博物館界にも大反響を巻き起こし、おかげでヨーロッパ各地やアメリカまでもが、この生態復原によるジオラマ展示を採用・普及するまでにいった。

これに対し、人文系博物館では、時代室（Period room）と呼ばれる新式の展示法が開発されて話題を呼んだ。なかでも1852年に創設されたドイツのゲルマン博物館は、ドイツ国家の歴史展示を骨子としながら1888年に6室からなる時代室を制作した。これは、いずれも実物大の室の広さで、家具や調度品を置き、また等身大の人形に衣裳を着せ、その当時の生活をそっくりそのまま再現したものである。室は、「1500年頃のチロルの農夫のゴシック風の室」「1600年頃のゲルマン風の室」「1700年頃のスイス風の室」「1700年頃のチロル風の室」「17世紀のニュルンベルグ風の室」2室（うち1室は貴族の室）からなっていた。<sup>(5)</sup>それは、ある時代に属する場面を想定し、それに関係する種々の資料を有機的に組み合わせる方法で、見学者をしてその時代の生活を体験させる特徴をもつ。その後、この展示法は、1873年、ノルウェーの北方博物館（Nordiska Museet）や1951年、アメリカのウィンターチュール博物館など欧米各地に波及するに至った（写真4）。

この特徴は、ジオラマ展示と類似するが、反面ジオラ

マ展示はあくまでも全体構成をボックス内部に納めること、しかも湾曲状の背景が場面の臨場感をかもしだす観点からすれば、展示形態上、両者は区別されるべきものである。

そして、現在ではアメリカがジオラマ展示のメッカとして、技術研究が念入りになされるとともに、非常に高い普及率を自負している。デンバーの自然史博物館（Denver Museum of Natural History）では、建国200年を記念して大改装がなされたが、そこにジオラマ展示の製作が計画され、北アメリカ、アフリカの野生動物や北米インディアン<sup>(6)</sup>の生活などを描いたジオラマ展示が出来上がった。しかも、その製作にかける情熱も相当なもので、佐々木朝登によれば、アフリカのサーベルアンテロープをテーマにしたジオラマ展示は、5年以上もの歳月をかけて製作中であるらしい。ここに、なにやら妥協を許さないアメリカ人のフロンティア精神を垣間みる思いがする。また、ニューヨーク自然史博物館<sup>(7)</sup>（The American Museum of Natural History）は、ジオラマ展示の質量共に優れた博物館として国内でも名高い。なんと、動物生態復原のジオラマ展示だけでも28コマも設置されているのだから、まさに驚きである。

#### (b) 我国の場合

我国におけるジオラマ展示のおこりは、明治時代に西欧文物を盛んに流入した時点にまで遡ることができる。明治初年、横浜で西欧人が市民に見世物としたことが契機となって、1899年（明治22年）に浅草公園の花屋敷の隣には、ジオラマ館と称する見世物小屋ができるほど

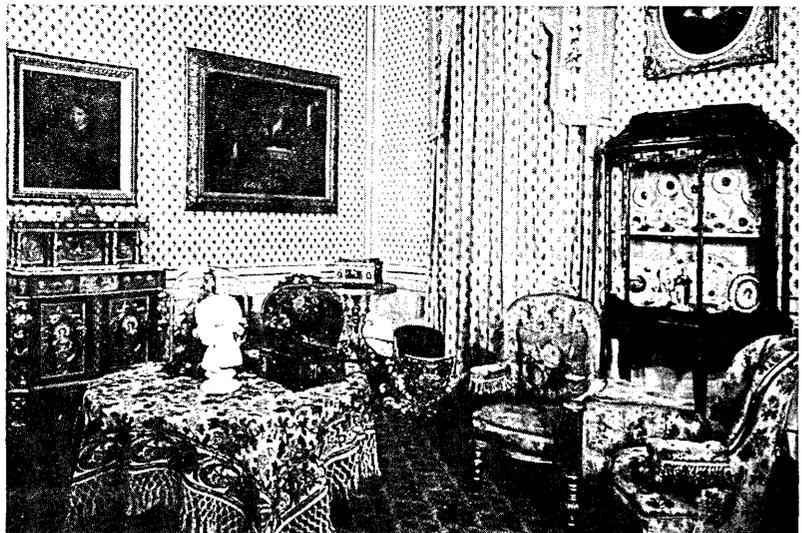


写真4. 時代室展示例  
（サウスケンシントン  
パレス・イギリス）

であった。「憲法発布式の図」「桜田門外要撃の図」「愛宕山浪人結束の図」など、当時流行の場面を題材にして、背後に油絵の背景画を据え置き、前面にはその場面に関する人物模型や自然物その他情景模型を要領よく配置し、場面の立体感を引き立たせるために照明技術を工夫し、観客があたかもその場面に遭遇したかのごとき臨場感を与えるものであった。

こうして、見世物的発想が契機となって、市民に普及したジオラマ展示の原型は、その後、西欧の博物館にてジオラマ展示を見聞して、井底の蛙から脱け出した知識人の発想も併い、主に教育界への利用が活発化した。<sup>(8)</sup> 1932年(昭和6年)に開館した東京科学博物館(現在、国立科学博物館)では、動物の生態展示をめざした我国初のジオラマ展示が公開された。展示の立案・企画者の<sup>(9)</sup> 1人、飯塚 哲は、<sup>(10)</sup>

従来我国に於て動物標本と云えば動物の剥製なり酒精漬なりを、個々別々に陳列したものであるが、此の方法では其の動物が如何なる状況の土地に棲息するか、いかなる生活法をするか、穴居を好むか、樹上生活を主とするか等の事は少しも顧みないのであるから、単に動物の外形や姿勢を知るに止まる標本の陳列であった。のごとく、従来の動物展示を批判する観点から生態展示の必要性を強調した。そして、その方法として、綿密な調査を踏まえて、「山林の動物生態」「海の鳥獣類生態」「馴鹿の生態」「ハゲワシ類の生態」からなる4コマのジオラマ展示を製作・公開した。

こうしてジオラマ展示の活用は、自然科学系博物館の生態展示が中心となって、以後、優位になってゆくことになる。これに対して、人文系博物館にジオラマ展示が導入・活用されるのは、戦後になってからのことであった。ジオラマ展示に関する両系博物館のこうした歴史的違いは、技術的問題も一理だが、その本意は教育性の是非に帰結するのではないだろうか。つまり、明治初年に西欧から導入された教育機関たるべき博物館の基本思想は、自然科学博物館との間に歩調の乱れを生じた。自然科学博物館は、前述した飯塚の発言にみるごとき生態展示の効用、また学校教育との提携などを通じて、博物館は教育機関たるべく努めてきた。しかし、人文系博物館は、懐古趣味的な資料の取り扱いが支配的であったため、教育性に欠けていたのが実状であった。

ところが、1946年(昭和21年)3月、アメリカの教育使節団が作成した報告書や、1951年(昭和26年)、博物館法の制定により、博物館は社会教育的使命をおびたる機関との認識がなされ、ここに自然・人文両系博物

館の活動目的が共通することになった。殊に、展示活動の教育的配慮に遅れをとっていた人文系博物館は、歴史的生態研究やジオラマ展示を用いた復原技術の研究が旺盛に実施された。

そして現在、いかなる都道府県の博物館を訪れても、ジオラマ展示を採用・活用した例は、すこぶる多く、見学者の興味の的となっている。

### 3. ジオラマ展示の特徴

#### (a) 展示法の大革新

博物館史上、収蔵・鑑賞のための博物館から教育普及のための博物館へと質的転換がなされるなかで、展示法にも大きな変革が強いられるようになった。<sup>(11)</sup> ジオラマ展示の出現もその1つである。棚橋源太郎は、ジオラマ展示を前述の時代室(Period room)なども含めて、集団陳列(Group exhibition)、原地集団陳列(Habitat Group)と総称し、こうした展示法が発達・普及したことについて、

従来一般に行なわれてゐた棚の上へ陳列品を雑然と列べた乾燥無味な古い陳列法の反動としての現はれに外ならないと云うことも数えられるのである。集団陳列法と称するものは、もと陳列法を劇化して、陳列場や博物館を一般大衆に、興味あるものたらしめたいという努力の現はれで、人類の行動や動物の生活状態を知らしめる上に、最も有効な方法であることに疑ひない。集団陳列は興味あり、且つ美しいものとして、来観者の眼を喜ばすばかりでなく、実状実景を示すものとして、その印象が深いからである。

と、主に見学者の情操面に照らした評価を与えている。たしかに、ジオラマ展示は視覚からの理解を容易にさせる。しかし、その理解が、楽しみ(Amusement)の次元で終止するか、教育的次元にまで高揚させるかのいずれかは疑問が残るところである。博物館(Museum)には、楽しみ(Amusement)の要素も大切であることは、語形の親近性からも明らかである。しかし、それを一躍して教育的次元をもってゆくためには、見学者の意識もさることながら、ジオラマ展示化の観点を明確にすることが必要なのではあるまいか。<sup>(12)</sup>

また、加藤有次は、

一般に展示を行う際に、歴史的・時間的な事象を文字で解説すると、それが一つの事象であっても多大な字数を必要とするのであるが、このジオラマの集団展示は、一コマまた数コマできわめて多くの内容情報を絵画的に解説表現することができ、しかも物語的に理

解させることができる。

と、技術面からの効用性を述べられ、歴史系博物館では系統的展示法の一分野に大きな役割を果たし、自然系博物館では生態展示の一つの方法として評価を与えている。

ジオラマ展示の特徴については、棚橋や加藤の発言にみるごとくであるが、他にもいくつかの利点があるので追加しておきたい。

まず、ジオラマ展示は、尺度が自由自在である。これは、展示対象物や展示面積等の応用範囲が拡大することに結がる。展示対象物の大きさは、ミクロからマクロまで自由自在であるし、展示面積の都合によって展示対象物の大きさを使い分けることができるのである。

次に、持ち運び用のジオラマ展示装置の存在をあげることができる。主に、学校教材としての貸し出し用に使われるもので、特にアメリカでは、未開民族の生活や石炭坑内の作業状況などのジオラマ展示が、小型ケースに収納され、小学校などへ盛んに貸し出されている。<sup>(5)</sup>

(b) ジオラマ展示の静的イメージから動的イメージへ  
ジオラマ展示は、自然系では動植物の生態展示など、また人文系では大古の人間生活や諸生産活動などの復原展示からなり、これらは、いずれも時間と空間の両軸が混わる接点に位置するわけである。換言すれば、ジオラマ展示が復原する場面は、見学者に臨場感を与えながらも、ややもすれば無味乾燥な、俗な言い方をすれば、か

らくり小箱といった印象を与える危険がある。しかし、近年、ジオラマ展示のより効果的な応用化がなされるなかで、こうした静的イメージをいかにしたら動的イメージに高揚するかというアプローチがなされている。そのいくつかの例を紹介し、併わせてその特徴を述べてみたい。

まず、物語的ジオラマ展示と称すべきものがあげられる。これは、歴史的人物の功績や歴史事象の記述を題材にしてジオラマ展示を連続して構成するものである。鹿児島県の西郷南州顕彰館は、西郷隆盛没後百年を記念して、その偉業を後世に伝えることを目的に建設した。館内には、その生いたちから倒幕への道を通じて征韓論争に敗れ、西南戦争に至るまでの生涯が9コマのジオラマ展示で構成されている(写真5)。やはり、北海道函館市五稜郭タワー史蹟館には、函館戦争の経過が同種のジオラマ展示で構成されている。両館のジオラマ展示は、その1コマごとに、場面の解説文が添なわり、音響効果までもが手伝って、見学者はそれが作り物であることを知りながらも、妙に歴史的な迫力に引き込まれてゆく。多くのジオラマ展示が一場面だけを原則とすることに比べれば、本例は時間軸に沿って連続的に多場面の事象を取り上げて物語作りをめざしている点で、静的よりもむしろ動的なジオラマ展示ということができる。

そして、次はジオラマ展示に問題意識をもたせた場合



写真5 物語的  
ジオラマ展示例  
(鹿児島市立西郷  
南州顕彰館)

をとりあげる。ドイツのニーダーザクセン州立博物館<sup>(13)</sup>(Naturkunde Abteilung Des Niedersächsischen Landes Museum)には、公害問題を題材にしたジオラマ展示が注目を集めている。これは、「汚染される川」と題して3コマのジオラマ展示(1937年・1957年・1977年)を用意して、人間活動が拡大されて自然に及ぼす影響がしだいに汚染という形で進むにつれて、小川の生物がどのように変化してゆくかが年代ごとに描かれている。この展示によって、見学者は公害と自然破壊の様子をまのあたりにみせつけられる思いになることであろう。題材が実生活に関連したものだけに、もはや無関心ではられないのである。従来の対象物主体のジオラマ展示が静的なものとするれば、こうした問題意識主体のジオラマ展示は動的なものといえることができる。

つまり、静的なジオラマ展示から動的なジオラマ展示への移行は、ジオラマ展示本来の特性を生かしながらも、そこに新たな価値感を与えてその特性を十二分に引き立たせてやるのが肝要なのである。

#### 4. ジオラマ展示の問題点

##### (a) 考証

ジオラマ展示製作時に行う考証は、果して誤謬なく正確なものなのだろうか。博物館が設置するジオラマ展示は、多種多様である。そのなかでも、歴史系博物館が対象とするジオラマ展示には、考証の問題点が常につきまとい、しかも時代が遡って資料が稀少になればなるほど、その問題点も多大になる。それに比べれば、自然系博物館が主に対象とする生態展示は、現地調査が可能なことから、真実を歪曲する危険が少ない<sup>(14)</sup>。しかし、考古学を唯一の学際的手段とする対象物は、そこに数百年から数万年という時間の隔絶が横たわっているため、ジオラマ展示化には周到な準備が必要でありながらも、真実を歪曲する危険性から常に免れないのである。

そもそも、アメリカの歴史系博物館のジオラマ展示は、インディアンの生活や文化が題材となっていることが多い。これは、アメリカの歴史がインディアンとの抗争から初まった事情があり、その後、白人が保護したインディアンの生活を記録・復元したものが利用されたからである<sup>(15)</sup>。したがって、考証は正確になされ、インディアン生活の理解が、かなりの信憑性をもって市民に働きかけている。だが、このことは必ずしも我国の歴史系博物館にみられるジオラマ展示の信憑性と率直に結びつくものではなく、仮りに、そのジオラマ展示が、アメリカから流入し我国なりにその題材を飛躍させた結果ならば、

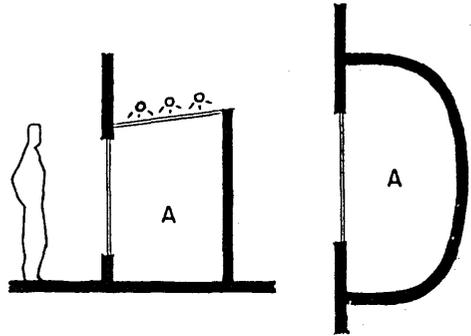


図1. ジオラマ展示の横断面及び平面観  
(A. E. PARR 1961より)

我国の歴史系博物館のそれは再考の余地がある。

##### (b) ジオラマ展示化の選定

ジオラマ展示の題材を何に求めるかは、博物館の性格にもよるが、おうおうにして、何の目的で題材に選定したのか理解に苦しむ例がある。資料の豊富さ、豪華さなどに重点を置くあまり、ジオラマ展示の意図がぼやけてはならない。

その製作には、いかに象徴的な典型を選定するかが重要であるとともに問題点でもある。この典型の選定が曖昧では、前述の棚橋や加藤によるジオラマ展示の利点は、一転して欠点になりかねない。

では、この典型の選定法は、いかなるべきか。特に、歴史系博物館の場合には、歴史観を展示の根底基盤に据えなければならず、そこから歴史的意義を市民にアピールする役目を荷っているのである。そして、全体の展示構成のなかで、ジオラマ展示の情報的特質を踏まえて、その配置にも注意し、かつ展示構成上でジオラマ展示の位置づけを絶えずフィードバックしてやる必要がある。

##### (c) ジオラマ展示を設置する側の対応

しばしば、ジオラマ展示には、予算がかかりすぎるという批判がある。実際、精巧の度合によっても異なるが、小型でも百万円代から大型になると数千万円代に至るものまでさまざまである。

問題は、単に予算額のことばかりではなく、その依頼者がいかなる意図からジオラマ展示を採用するのかを肝心なのである。大局的にみれば、人目に豪華さを強調するアクセサリーごときものとするのか、あるいは教育的効果に不可欠の資料とするのか、そのいずれの立場でジオラマ展示を採用しようというのかである。ややもすれば

ば、行政サイドで建設した新設博物館の実状は、建設時の予算を奮発して出資するが、その後の管理・運営費は零細そのものといった巧言令色鮮し仁である場合が少なくない。ややもすれば、ジオラマ展示は展示室の豪華さを強調するのに効果を上げるが、こうした例は史観も問題意識もなしにただやみくもに製作されただけで、教育的効果には欠ける。反面、館にとっては教育上、不可欠と見做されるジオラマ展示は、どれほどの予算でも、それは市民のためにぜひとも還元するべきである。

## 5. ジオラマ展示の将来

### (a) ジオラマ展示の進歩

今日、専門家によるジオラマ展示の技術開発は、一つよければ又二つと進歩しつつある。また、新たなアイデアもさかんに織り込まれたジオラマ展示をみるにつけ、もしやジオラマ展示技術は将来我国の輸出産業の仲間入りをするのではないかと思わしめたりもする。

秋田県立博物館のジオラマ展示「岩井堂洞穴遺跡」<sup>(16)</sup>は、可能的ジオラマ展示として注目される。これは、山間の川岸にある洞穴で生活する3人の縄文人の様子を復原したもので、その洞穴内に入り込んだ一匹のひき蛙の口が自動的に開閉する仕組みになっているのである。館としては、御愛嬌のつもりで試作したらしいが、見学者にとっては、それが緻しい縄文時代の生活にぼつりと一息つく余裕のようなものを感じさせる。さらに、縄文人の声までも復原して応用化を試みたようだが、残念ながら実

現に至らなかった。

また、このジオラマ展示よりもさらに教育的効果をあげている例に、鹿児島県立博物館のジオラマ展示「日本の宇宙センター・かごしま」をあげることができる(写真6)。これは、湾曲状のスクリーンを背景に置き、前面には宇宙センターの模型が配置されている。背景のスクリーンには、夜明けの星が投影され、宇宙ロケットの発射模様の音響解説がなされると、模型が始動し、秒読みの合図とともに宇宙ロケットが発射される。その後、スクリーンに宇宙ロケットが上昇してゆく様子や合わせて宇宙開発の意義などについてのフィルムが映写される仕組みになっている。この模様は、1日7回、上演されることになっており、時刻になると見学者はジオラマ展示の前に用意された座席で観覧できる。これは、臨場感、可動性、音響(音楽・解説)、映像などを一同に集約した総合的なジオラマ展示として注目値する。

ところで、ジオラマ展示の特徴の1つである尺度の自由性について、我国ではそれが十分に応用されていない。というのは、原寸例あるいは縮尺例が主体で、他方の拡大例はみためがたがいない。例えば、縄文時代の住居生活風景を復原するならば原寸例が理解しやすいだろうし、または当時の集落構造や周囲の環境を復原するならば縮尺例が便利である。ならば、ミクロ的な物体を可視的な大きさに拡大した例は、教育的効果がないといえるのだろうか。

こうした観点から、アメリカの自然史博物館では、ミ

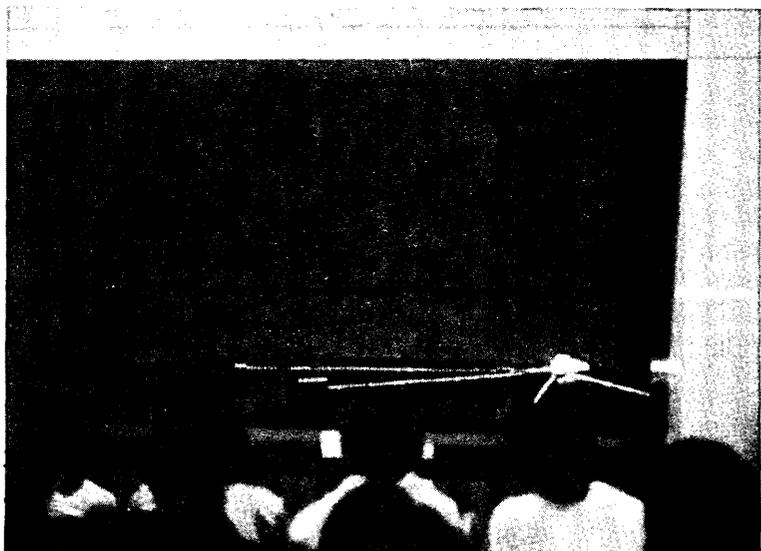


写真6. 動的ジオラマ展示例  
(鹿児島県立博物館)

クロ的な生物とその環境を拡大したジオラマ展示が教育的効果をあげている。研究者は、顕微鏡観察の資料をもとにして、数十倍の大きさに復原した昆虫類などの生物や植物の模型をジオラマ展示に供しているのである。アメリカ自然史博物館(American Museum of Natural History)では、「森林下の地中の生物」と題して実物を24倍大に拡大したジオラマ展示が用意され、市民のミクロ的な観察力を養うのに役立っている。

以上にあげた例を踏まえながら、今後のジオラマ展示は様々な発展が予想される。特に、ジオラマ展示の可動化は、前述の博物館例以外にも多様な使用方法があるはずだし、また音響効果の利用法も期待される。

一方、ジオラマ展示をみるサイド、つまり市民にもある意味で、見学意識を覚醒してもらいたい。つまり、それをみてただ驚き感心するだけではなく、なぜ驚き感心するのかを考えなければならぬ。ジオラマ展示は、あくまでも教育的展示効果をねらった装置の1つである。

よって、その効果を発揮するには、見学者のものに対する知識欲が基本になければならぬ。市民は、博物館から何かを教わろうと意識するのではなく、逆に博物館で何をどうやって学ぶかを意識しなければならず、博物館では市民が主体者なのである。したがって、ジオラマ展示は、こうした市民にとって初めて教育的効果を発揮するわけである。

しかし、市民には、このジオラマ展示に対する理解が欠けている。そこで、ジオラマ展示が果たす今日的役割を中心に、思考や技術面などを総合したジオラマ展示に関する公開の場を市民に提供することも一助であろう。

#### (b) 展覧会「ジオラマ展示」の開催

ジオラマ展示の現状を認識し、明日への指向性を開発してゆくことを目的に、博物館関係の諸団体やジオラマ展示の製作メーカーなどが、ジオラマ展示をテーマにした公開の場を企画・立案してはどうだろうか。

まず、市民を対象にジオラマ展示の存在や、その役割または利用性についてアピールをうながすことから、博物館に対する認識を深めるように務める。殊に、ジオラマ展示の製作にかかる準備や努力などの内容をテーマに日頃、博物館では知られない舞台裏を披露することに務めてはどうだろうか。また、博物館関係者や製作メーカーの専門家らは、ジオラマ展示の資料や技術を公開し、相互の情報交換の場にあててはどうだろうか。製作メーカーサイドのオリジナリティーを相互に比較検討し、それらの特徴を選り出すことで新たな指向性が打ち出されることもありうるし、博物館サイドはそれらを参考にし

ながら、自館の展示に活用すればよい。

ジオラマ展示、ひいては博物館展示法のより教育的効果の高い方法を渴望するならば、虎穴に入らずんば虎児を得ずといわれるごとく、製作メーカーごとの方針や博物館関係団体の諸事情を廃してでも、こうした企画を実践してみることは決して徒労ではないと確信する。

## 6. おわりに

本稿で題材にしたジオラマ展示は、展示法上からいえばほんの一分野に過ぎない。しかし、こうした分野ごとの地道な研究が、今後とも博物館学研究には不可欠だと考える。

今回は、ジオラマ展示を概略的に述べることに重点を置いたが、いずれ機会があれば、資料化したジオラマ展示を題材にして、その分析試論を述べたい。また、本稿が今後とも、ジオラマ展示研究の動向づくりの捨て石に役立てば望外の喜びであり、むしろ本稿の目的はそこにあったといっても過言ではない。先学諸兄による御教授、御鞭撻を賜りたい。

なお、文末となってしまったが、本稿を記するにあたって、次の方々の御協力を賜わった。鹿児島県立博物館館長前島義己氏、鹿児島市立西郷南州顕彰館館長児玉正志氏からは写真発表の御許可をいただき、また国学院大学教授加藤有次氏に御助言をいただいた。厚く感謝を申し述べる次第である。

### 〔脚註〕

- (1) 浜田青陵『考古学入門』創元社、1941。
- (2) 棚橋源太郎『博物館・美術館史』長谷川書房、1957。
- (3) Lino.S.Lipinsky『DIORAMA』The Encyclopedia AMERICANA, 1979。
- (4) 加藤有次・金山喜昭「館種別博物館史・歴史系博物館史」博物館学講座2, 雄山閣, 1981。
- (5) 棚橋源太郎『博物館教育』創元社, 1953。
- (6) 佐々木朝登「展示の実際と展示替え」博物館学講座7, 雄山閣, 1981。
- (7) 斎藤常正編『ニューヨーク自然史博物館』世界の博物館4, 講談社, 1978。
- (8) 記者のポケット日記から「博物館のジオラマ式陳列」博物館研究1-4, 1928。
- (9) 現在の国立科学博物館は、その前進を明治10年教育博物館として公開したことにはじまり、明治22年、高等師範学校附属東京教育博物館、明治35年、東京高等師範学校附属東京教育博物館、大正3年、東京教育博

- 物館, 大正 10 年, 東京博物館, 昭和 6 年, 東京科学博物館を経て, 昭和 24 年に現在名となった。
- (10) 飯塚 啓「博物館における生態陳列について」日本学術協会報告 11-3, 1936.
- (11) 棚橋源太郎『博物館学綱要』理想社, 1950.
- (12) 加藤有次「館種別博物館における展示と展示法・総合博物館」博物館学講座 10, 雄山閣, 1981.
- (13) 小島郁生編『ヨーロッパ自然史博物館』世界の博物館 9, 講談社, 1979.
- (14) アメリカの自然史博物館における生態展示には, 剥製動物標本の瞬間的動作を復原する技術が開発, 実用化している。しかし, 観覧者がその動作からうける時間イメージはばらばらで, 製作者の意図が伝わりにくいという問題点がある。どれほど精巧に生態復原しても実際の事象にはかなわないが, 事実の歪曲ではない。
- (15) A, E, PARR 「The Problem of Arrested Movement in Static Exhibits」CURATOR IV-4, 1961.
- (16) 小林達雄「歴史系博物館の展示 — アメリカと日本 — 」東京都博物館協議会会報 9, 1971.
- (17) 富樫泰時「岩井堂洞穴のジオラマ」博物館研究 11-5, 秋田県立博物館特集, 1976.
- (18) A, E, PARR 「The Habitud Group」CURATOR II-2, 1959.
- (19) RAYMOND H. DE LUCIA 「Constructing Large Models of Very Small objects」CURATOR I-4, 1958.